

推薦状

本学助手太田奇君は、昭和五十一年三月神戸や外国語大学中国
学科を卒業して、同年四月、本学大学院人文科学研究科中国文学専攻
修士課程に入学、その後、二年間の中華人民共和国留学を含めて昭和五十八年
三月に至るまでの七年間、修士課程、博士課程に在学し、さらに昭和五十八年四月
より今日まで、本学人文学部中国文学研究室の助手を勤めております。

昭和五十三年一月に提出した修士論文「西儒耳目資の音系について——入声の
特質をめぐって——」では、「西儒耳目資」の音韻体系を考察する一方で、「洪武正
韻譯訓」や「蒙古字韻」の入声と関連づけて考察すべきだと主張しました。

このように中国語資料の研究にさいして、外国語資料までも広く考慮するこ
うのが、同君の特徴であります。

このことは、「人文学報」第一四〇号（東京都立大学人文学部、昭和五十五年三月）に掲
載された「矢田小論」についてもみられるところであり、いわゆる「大音、国音の対立とその対立の
消失経過を論ずるのに、矢田語資料を活用した点」がきわめてユニークでありました。

昭和五十五年、山東大学に留学してからは、その指導教官銭曾怡先生の指導のもと
に山東方言の調査に従事、多くの問題意識を啓発されました。その成果の一つが「人文
学報」第一六六号（昭和五十九年三月）に掲載された「山東方言における『見化』」であり、
山東方言を中心としながらも、広く中国全域をみわたして考察がなされる点には、全く前
述の特徴と軌を一にするものであります。

中国における方言の問題は、「切韻」の編纂に関してのみならず、特に近世音に
関しては重要な課題であります。「洪武正韻」は、いわゆる濁音を保存するから、南方
音にもとづいた韻書である、とは単純にいえないのであります。一般に字音の伝統
ないしは先行する韻書の伝統を方言の問題とからめて考える必要が生じます。

南北音の折衷が標榜されることも多く、さてこそ、「洪武正韻」に対して、「禮部
韻略」の影響を考える必要も生じ、「西儒耳目資」や「蒙古字韻」などの韻書も
考慮の対象に含める必要が生じます。従って、現代の諸方言間にもみられる関係を
深く考察することは、音韻史研究上、殊に近世音の研究に対して、多角的な深
みのある視点を提供するものと思われまします。今後、方言研究と糧にした同君の音
韻史研究が発表されるものも期待いたします。

また、同君は、現に横浜市立大学文学部において、中国語および中国語学
演習（専門科目）を担当して、教育に努めても、熱情をそそいでおります。本学に
おいて、研究会を主宰して大学院生を指導していることも、教育者としての自覚

にもとづくものであります。
以上によろ、貴学公募の中国語および中国音韻学を担当する人物として最適の人材であると確信し、ここに同君を推薦する次第であります。

昭和三十年七月十一日

東京都立大学文学部中国文学研究室

教授 慶谷 養信 (慶谷)

神戸市外国語大学長

林 一郎 殿

東京都